

「床の間は各種芸術の限界およびその意義に関して、比類なき決定の役割を果たすもの」で「地球上どのような芸術創造を見渡しても、造形美術に使用するものとして、床の間に精緻を極めた形式を創り出したところは何処にもない」「世界の模範と称しても差支えない一つの創造物」である、と床の間を日本美の象徴として絶賛した。

日本家屋については後段に詳しく述べることにして、ここではまずこの絵画のために在る床の間について述べることにする。床の間が立派な部屋にとっては——多少の例外はあるにしても——不可欠のものであることは、何人と云えども否定するものはあるまい。教養のある人達は、折々の気持やその機会に応じた掛物をこの床の間にのみかけて、それからさらにこの掛物を背景として特にその絵に応ずるらしい生花の瓶であるとか、彫刻の型になった香炉とか、時には独立した彫刻をもそこに据えたりするのである。男の子や女の子のお祭りの人形もそこに飾るし、稀には故人の祭壇をここに設けることもある。床の間は芸術および芸術の集場合所であつて、そこに据えられたわずかな什器と相俟つて、思いのままに変ずる独自の雰囲気や部屋に与え、さらにまた部屋そのものに対しても均衡による能うる限り間然するところのない純粹さを要求する。これを煎じ詰めて云えば、部屋が床の間の種々の放射を担い得るように、そうした美の中立性すらも部屋に要求すると云えよう。従つてこの部屋は、それ以外の美術品は一つとして人々の眼に触れしむることを許さない。かくのごとく床の間は各種芸術の限界およびその意義に関して、比類なき決定の役割を果たすものである。再言すれば、建築はその抽象的な均衡の営みによるその純粹さが、最大限度に中立的である場合において、これが美しいと云えるのであつて、他方彫刻および絵画（掛物の一部分、ないしその全部が文字である場合すら少なくない、詩についてもまた同断である）、居住者の精神生活なり、感情生活なりに最大限度に接近した場合においてこれが美しいということになってくる。すなわち、建築の意義は抽象的な不偏性であり、絵画、彫刻および裝飾の意義は、精神的なものへの直接的な接近にあるということになる。

地球上どのような芸術創造を見渡しても、造形美術に使用するものとして、床の間に精緻を極めた形式を創り出したところは何処にもないと云つてよい。こう云えば、早速寺院の祭壇とか家の中の祭壇とか、あるいは聖者の社などを引き合いに出すことを余儀なくされるであろう。これらの祭壇に比べるにしても、床の間は宗教との関係が少しもないし、さらに文化的要求の集中される場所であるという重大点よりして、これとは全く相違する。従つて芸術家はこの床の間によつて、自分達の作品がいかに応用されるかを充分識り得るのであつて、床の間は芸術そのものの様式とその技法に對して、かかる力ないし生きた効果を具えているのである。室内建築および全家屋の一部分として、この床の間の現象そのものが、すでに建築であるとも云えよう。従つて床の間は地球上どこにおいても達成され得なかつた所の、まことに世界の模範と称しても差支えない一つの創造物なのである。

かくのごとき特質を具備している以上、床の間がその抽象的な力によつて文化と有用との間の段階を、極めて明白に説明しているということもまたことに宜なりと云うべきである。床の間が一般に使用される部屋にまで設けられているその有様が、しばしば鋭い閃光のようにその事実上の地位を、さらにはその真実の地位を照らし出してくれりとも云えよう。その家がどのような家であつたにしろ、床の間の裏側が何の部屋であるかということは、ここでは全く問題になつていない。家屋の向きやその大きさの關係でそこに書齋のある事があるうし、廊下があるうし、便所があるうし、一向支障はないのである。茶の会合のために建てられたあの小さな文化的に秀れたいわゆる茶室においても、小便所に使用されている前房の附いた便所が床の間の背後をなしていることさえ全く少なくないのである。

壁一重を隔てて、およそこれ以上のものはないと云つてよい対立！さらにこの対立によつて示される二つの世界。